



### ふるさと懐石志ぐれ亭 女将

しむら かずこ

## 志村 和子さん

1942 年生まれ 喜多方市出身

ふるさと懐石志ぐれ亭を創業し女将を務めるかたわら、会津まほろば推進協議会の副会長、会津まほろば里人の会会長として、仏都会津に息づく精神文化を県内外に伝えている。

### 会津まほろば推進協議会

おかげさまで、会津は「まほろば※」が浸透してきました。現在は、喜多方市や会津美里町、会津坂下町など様々な団体で構成される「会津まほろば推進協議会」を中心に活動しており、まほろば塾という勉強会を開催したり、各地で出前講座や講演などを行ったりしています。最近、まほろばについて「真秀呂場」という漢字を用いた絵解きも始めました。また、まほろばの活動を早くから始めていた山形県の高島町や奈良県の薬師寺とも県を越えて交流しています。

※まほろば…日本の古語で、「住みよい場所」や「素晴らしい場所」という意味

### 活動を始めたきっかけ

実家が商いをしていたので、幼いころからよく母親に連れられてお寺にお参りに行ってしており、寺社仏閣に関心はありましたが、「おさらぎの宿」で働いていた時に、往時大仏様が居られたこの場所をみんなの憩いの場、まほろばの里にしたいという創業者の思いを知り、まほろばを意識するようになりました。そのため、志ぐれ亭もはじめは会津大仏の近くに、現在は熊野本宮のそばで営んでいます。その後、平成 18 年の会津ディスティネーションキャンペーン（JRとの協働による大型観光キャンペーン）に参加し、仏都会津を多くの方に知っていただいたので、これをつないでいくため現在の活動を始めました。



志ぐれ亭 外観

西の裾野に位置し、眼前には会津盆地が広がる。

### 山形県高島町、奈良県の薬師寺との交流

高島町とは、町の方がおさらぎの宿に泊まりにいらしたというご縁もあり、みちのくまほろばでつながろうと交流があります。高島町はまほろばの立ちあげが早く、町内には古代人の生活を再現したレプリカがある博物館など素晴らしい施設があります。今年度も会津まほろば推進協議会で高島町を訪問し、意見交換をしてきました。また、今度は（高島町が）会津美里町にきますとってくださいました。この交流は文化遺産を軸にした本物の交流になると思います。

また奈良県の薬師寺とは、高島町の方との交流の中でつながりができ、さらにディスティネーションキャンペーンの際に、神仏習合の原点は実は会津だと学ばせていただきました。現在みちのくまほろばを 3 泊 4 日、2 泊 3 日で回るコースが出来たので、そのパンフレットを渡すなど少しずつ交流を続けています。

## 行政と民間の関わり

今は、「競争だ、拡大だ」とやってきたことを見直して本物を探す時代になっていると私は思います。本物志向ですから、小手先だけで動いても人はついてきません。そのような中で行政と民間がどういう風に連携していくのかが問われていると思います。行政が拾い上げにくい部分を民間は自由に拾い上げることができますし、逆に民間が見落とす部分を行政がフォローすることができます。民でできることと官でできることを上手につなぐことができれば、より良いものになりますし本物が見つかると思います。

あづま旅館の女将の齋藤百合子さんはそれがとても上手だなと思います。ディスティネーションキャンペーンの時に初めてお会いしましたが、自分だけのものに固持しない方で、人と人をつないで上手に交流されています。女性は自分に固持しがちですが、人に委ねることも大事だと思います。自分を介さず人を繋ぐことができれば、交流も広がります。ですから、行政は民間からそういった人材を見つけて、協力していくと良いのではないかと思います。

また、まちづくりには消してはいけない軸があります。喜多方だと、蔵のまちや「まほろば」、あるいはラーメンなど何かしらぶれない軸を据えて共に連携し、そこから計画性を持って進めていくことが大切だと感じます。



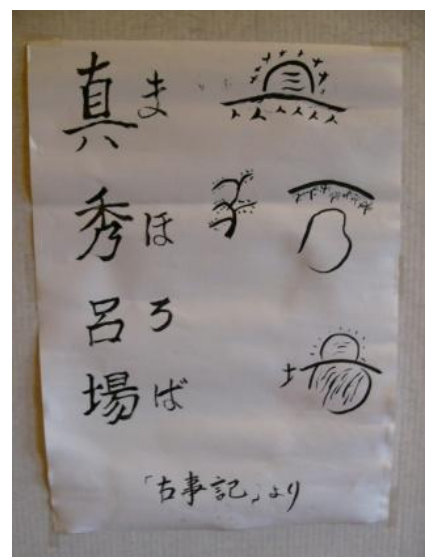
観光コンシェルジュ養成講座の様子

## 日本列島を読み解く

かつて日本は「豊葦原瑞穂(とよあしはらみずほ)の国」と言い、神様である太陽が真っ先に注ぐと考えられていました。日本列島の形を横たわった人体にたとえてみると、四国九州は手足、関東は肝臓や腎臓、そして、みちのく東北は胃袋や心臓にあたります。かつて心臓は魂と言われていましたから、東北は土壌が豊かであり、作物を耕し、精神文化を大切にすると場所であるという話もあります。

## まほろば会津

会津は素晴らしい「まほろば」です。「まほろば」は漢字にすると「真秀呂場」となり、代々人々が住む、住みよい場所という意味で古事記に記述されています。この文字を解いてみると、「真」はなだらかな山並みに宿る神様とその周りに集まる人や動物を表わしており、「秀」は盆地の周りに木の実が垂れた木が生い茂る様子を示しています。そして、「場」は太陽が出て土壌が肥えて草々が繁茂している様子です。東北には雪が降りますね。雪が地上に窒素をもたらし、落ち葉や動物のフンと混ざり肥料になります。これが雪解けで地上にも流れ出し、豊かな土壌が形成されます。このような土地には人の口がつながっていく(「呂」)ので「真秀呂場」というそうです。会津をみると南北に長い盆地があり、太陽が一日中差し込むので、植物が良く生育します。そして、塩分を含む豊富な水資源があります。ここは、天の利・地の利に恵まれた素晴らしい場所なのです。



「真秀呂場」の絵解き図  
漢字一文字一文字が表すものを描いている。

## 会津の精神文化

様々な方とのお付き合いを通じて、会津には本物の精神文化のルーツがあることが分かりました。例えば、どんなに小さな村にも鎮守様があります。その鎮守様を我々の先祖たちは五穀豊穡などを祈りながら、しっかりと守ってきています。祈ることは、求めるものばかりではありません。新米ができたら、それをお供えし、祭囃子や御神楽を行い神様に御礼をしてきました。今のように車でどこでも行って楽しめる時代ではありませんでしたが、そういう時代だからこそ受け継がれ、現在素晴らしい遺産となっています。これは宗教ではなく精神文化なのです。

喜多方は、大仏様があり熊野神社があり、そして長い歴史があります。そういった精神文化の中で親方様制度が育ち、蔵がたくさん建てられ、また、庚申講などの講が盛んに行われていました。この高い精神文化があったからこそ喜多方事件※にもつながりました。

※喜多方事件…1882年(明治15年)に喜多方警察署を中心に発生した自由党员、農民及び自由民権運動への弾圧事件のこと。圧政に対し反対運動を展開していた農民たちが指導者の逮捕を受けて警察署周辺に押し寄せ、その後自由党员や関係者約2000人が逮捕されたともいわれている。



## 伝える祈りの心

喜多方には数々の文化遺産がありますが、祈る心があったからこそ先祖が代々守り、今日まで残っています。お祈りすることは私たちの生活の中で薄れてきつつありますから、ここ熊野本宮の在所、上三宮・岩沢地区では、毎月1日に近所のおばあちゃんたちでお朔日(ついたち)参りを行っています。

喜多方は、朝日・夕日をどちらも体感することができる場所です。本物を探す時代になっていますが、太陽や月は本物です。私たちは本物を体感できる、素晴らしい場所に生まれ育ったという思いを小さい頃から持っていたきたいです。そのためにも、おじいちゃんやおばあちゃんが先祖や鎮守様、他者を思い手を合わせて祈る姿を孫に見せ、この精神文化をつなげていくことが大事だと思います。

## 今後の展望

東北には世界遺産の中尊寺をはじめ慈恩寺や立石寺、熊野大社や出羽三山などたくさんの寺社仏閣がありますので、いずれは、これらを結び「みちのくまほろば」を展開したいと考えています。そして、みちのくの精神文化を学ぶコースを作り、特に同じく神仏習合の地がある関西の学生の方に修学旅行などでおいでいただきたいと思っています。

## 大切なことは“つながり方”

これまで、人と人とのつながりの中で活動を続けてきました。「絆」という言葉は、糸が半分と書きます。わたしもあなたも半分、結ばなければ半端者同士で何も生まれません。お互いを結ぶから「絆」になります。そして、そのつながり方も重要です。私利私欲で結ばれる関係は長続きしません。お互いを信じあえるような本物のつながり方を見つけることが大切だと思います。

